

## 節連接表現の中のモダリティ

著者	角田 三枝
雑誌名	国立国語研究所論集
号	3
ページ	143-159
発行年	2012-05
URL	<a href="http://doi.org/10.15084/00000494">http://doi.org/10.15084/00000494</a>

## 節連接表現の中のモダリティ

角田 三枝

国立国語研究所 共同研究員 [-2012.03]

### 要旨

日本語の節と節を結ぶ接続表現の中には、カラ、ノダカラ、モノダカラのように、ある形態素とそれに他の要素が付いた形式とのセットがある。本論は、(i) カラ、モノダカラ、ノダカラ、カラニハ、(ii) ナラ、モノナラ、(iii) ダケ、ダケニの三つのセットについて以下のことを述べる。

もとなる形態 (例えばカラ) に、他の要素 (例えばノダ、モノダ) が付くと、何らかのモダリティ的な意味が加わることがある。すなわち、意味が特化する。同時に、使用できる環境も特化する。具体的には、他の要素が付いた形式は、「節連接とモダリティの階層」の五つのレベル (角田 (2003, 2004), Tsunoda (forthcoming) 参照) において、使用できる範囲が狭まる。さらに、モノダカラ、モノナラ、ダケニの用法は、非連続的な分布を示す。この現象は有標性の原理を反映している。つまり、ある接続表現が形態的に有標になり、同時に、意味的にも有標になり、統語的にも使用できる範囲が狭くなる。すなわち、有標になる\*。

キーワード：モノダカラ、モノナラ、ダケニ、カラニハ、有標性

### 1. はじめに

日本語の節と節を結ぶ接続表現 (clause-linkage marker。以下、CLM とする。) の中には、例えば、カラ、モノダカラ、ノダカラ、カラニハのように、ある形態素 (ここではカラ) に他の要素 (ここでは、モノダ、ノダ、ニハ) が加わったセットがいくつかある。これらは、それぞれ意味、用法が異なり、何らかのモダリティ的な意味が加わることがある。この意味、用法の違いは、「節連接とモダリティの階層」の五つのレベル (角田 (2003, 2004), Tsunoda (forthcoming) 参照) において顕著に表れる。他の要素が加わった結果、意味が特化し、五つのレベルにおいては、使用できるレベルも狭くなる。

本論の構成は以下のとおりである。第2節では、モノダカラ、ノダカラ、カラニハ、モノナラ、ダケニなどが先行研究でどのように扱われてきたかを概観する。第3節では、五つのレベルの観点から、個々のCLMの用法をみる。3.2節では、カラとモノダカラ、ノダカラ、カラニハを比べる。3.3節では、ナラとモノナラを比べる。3.4節では、ダケとダケニを比べる。第4節では結論を述べる。

### 2. モダリティを表す CLM

複合辞の研究 (永野 (1953), 松木 (1990), 藤田 (2006) など参照) において、形態素が組み

\* 本論文は、国立国語研究所の共同研究プロジェクト「節連接へのモーダルの・発話行為的な制限」(基幹型, 2009年10月～2012年3月, リーダー:角田太作)の成果です。本論の執筆にあたり、査読をご担当くださった国立国語研究所の査読委員の先生に、多くの貴重なコメントを頂きました。心より感謝申し上げます。

合わされることにより、ももとの意味の組み合わせ以上の特別の意味が表れることを述べている。本論では、節と節を結ぶ CLM について、ある形態に他の要素が加わることにより、モダリティ的な意味が生じる場合について考察する。他の要素が加わった結果、意味が特化し、使用できる範囲も狭くなることを、「節接続とモダリティの階層」の五つのレベル（角田（2003, 2004）, Tsunoda (forthcoming) 参照）の観点から述べる。

本論では、以下の三つのセットについて、それぞれの CLM を比べる。

- (i) カラとモノダカラ, ノダカラ, カラニハ
- (ii) ナラとモノナラ
- (iii) ダケとダケニ

本論であげたモノダカラ, ノダカラ, カラニハ, モノナラ, ダケニなどについては、先行研究でも何らかのモダリティ的な意味を表すことを述べている。

まず、モノダカラについては、話し手の気持ちを濃厚に反映する表現であること（泉原（2007: 306）参照）、また、主節では話者の言い訳、懇願などを述べることが多い（森田・松木（1989: 104）、泉原（2007: 307）など参照）といった指摘がある。

ノダカラについては、角田（2003, 2004）で詳しく述べたので、詳細は述べないが、主節で述べるのが当然のことである、ということ述べる前提部分をノダカラで形成する（田野村（1990: 102）、角田（2004: 112）など参照）と考えられる。

カラニハについては、永野（1953）が、「特に理由を提示して、課題の場を設定し、次に来る陳述を強く期待させる場合に使われる言い方」と述べている。遠藤（1984）も先行研究をあげ、カラニハで述べる前提を踏まえ、主節では、そうであるから当然……といったことを述べることに言及している。塩入（1995: 518）は、カラニハは、従属節の内容が程度の甚だしさ、物事に関する常識など、必然性の高い根拠を述べる場合に用いることを指摘している。

モノナラは、前接する動詞の活用形の違いによって、意味用法に違いがある。先行研究では、主に動詞の-(y)oo 形につく場合（「モノナラ 1」とする。）と、動詞のル形、タ形、可能形などにつく場合（「モノナラ 2」とする。）の二つに分けている。（玉村（1984）参照。）

モノナラ 1 については、主節は望ましくない結果を述べるとする先行研究（森田・松木（1989: 93）参照）や、かならずしもそうではないという先行研究もある。（玉村（1984: 84）、坪根（1996: 43）、中島（2005: 204）参照。）いずれにしても、主節では、何か大変なことになる、という意味を表すという見解がある。（森田・松木（1989: 93）、増倉（1996: 122）など参照。）

モノナラ 2 については、従属節で述べるのがほぼ実現不可能と思われるような場合に用いるという指摘がある。（森田・松木（1989: 94）、坪根（1996: 41）参照。）また、中島（2005: 200-199）は、主節において「挑発する、又はなじるような気持ちをこめて、つきはなす場合に」モノナラを用いることがあると指摘している。

ダケニについては、先行研究で述べているように、従属節の内容に相応して、あるいは、そのぶんなおさら、いっそう（此島（1983: 184）、森田・松木（1989: 101）、前田（2009: 152）、益岡（2011: 5）など参照）、また、かえって（中里（1995: 88）、田中（2010: 154）参照）といった意味が表れ

るという指摘がある。

以上のように、モノダカラ、ノダカラ、カラニハ、モノナラ、ダケニなどは、その CLM に話者の気持ち、モダリティとも言える、特別な意味が込められる、と言えよう。

なお、日本語の従来の文法研究では、従属節のモダリティについては、従属節の中にどのようなモダリティ形式（文末に現れるようなもの）が含まれるか、あるいは表せるかという見方が多いようである。（南（1974）、益岡（1997）、高山（2002）Narrog（2009）など参照<sup>1</sup>。）しかしながら、本論でみるように、明らかに CLM 自体がモダリティを表す場合がある。

### 3. 五つのレベルとの比較

#### 3.1 五つのレベル

次に、これらの CLM が角田（2003, 2004）および Tsunoda（forthcoming）の五つのレベルではどのような用法があるのかを述べる。

筆者が提案した「節接続とモダリティの階層」の五つのレベルをそれぞれ、I「現象描写」、II「判断」、III「働きかけ」、IV「判断の根拠」、V「発話行為の前提」と呼ぶ。この階層は、原因・理由、条件、逆接など、さまざまな意味の接続関係について成り立つ。角田の五つのレベルについては、すでに角田（2003, 2004, 2011）および Tsunoda（forthcoming）などで、詳しく述べているので、説明を省略する。特に角田（2011）には、簡単にまとめてあるので、参照されたい。以下は、簡単な定義のみである。

#### I「現象描写」のレベル

このレベルでは、従属節と主節の接続は、従属節で述べる出来事（あるいは事態）と主節で述べる出来事（あるいは事態）との事態としてのつながりを描く。I「現象描写」のレベルでは、主節は、実際に起きた現象、今ある現象、あるいは一般的な現象、習慣的に起こる現象などを述べる。

#### II「判断」のレベル

このレベルでも、I「現象描写」と同様に、従属節と主節の接続は、従属節で述べる出来事（あるいは事態）と主節で述べる出来事（あるいは事態）との事態としてのつながりを描く。I「現象描写」との違いは、主節のモダリティが話者の判断を表すことである。主節は、義務、免除、可能、許可、推測、後悔、感情、願望、意志、真偽判断など、話者の判断を表す。（I「現象描写」では、主節は単に出来事を述べるだけである。）

#### III「働きかけ」のレベル

このレベルでも、I「現象描写」、II「判断」と同様に、従属節と主節の接続は、従属節で述べる出来事（あるいは事態）と主節で述べる出来事（あるいは事態）とのつながりを描く。しかし

<sup>1</sup> ただし、Narrog（2009: 157-158）は、subordinate mood として、譲歩条件節に現れる命令形の -(y)oo について言及している。

ながら、I「現象描写」、II「判断」とは異なり、主節が、話し手から聞き手への働きかけを表す。主節は、助言、依頼、警告、勧誘、禁止（～ナ）、命令などを表す。

#### IV「判断の根拠」のレベル

このレベルでは、従属節で述べる内容と、主節で述べる内容が、実際の出来事、事態としてつながっているのではなく、認識上のつながりを表す。このレベルの節の接続として主なものは、従属節が判断の根拠を表し、主節が判断を表すような意味関係が成立する場合である。従属節で述べる内容を根拠として、主節で判断を述べるのである。また、逆接の場合は、従属節の内容から推論できる結論を主節で否定する内容になる場合もある。

#### V「発話行為の前提」のレベル

このレベルにおいても、従属節で述べる内容と、主節で述べる内容は、実際の出来事、事態としてつながっているのではない。このレベルでの節の接続の主なものは、主節が発話行為を表し、従属節はその発話行為の前提、前置きを表す関係である。従属節が、主節の発話行為を行うこと自体の前提となる場合である。

以下、それぞれの CLM を五つのレベルとの関係でみてゆく。

### 3.2 カラとモノダカラ、ノダカラ、カラニハ

ここでは、カラ、モノダカラ、ノダカラ、カラニハについて、それぞれの用法を五つのレベルとの関係で述べる。

#### 3.2.1 カラ

カラは、角田（2003, 2004）および Tsunoda (forthcoming) で述べたように、五つのレベルすべてで用いることができる。以下に例をあげる。

- (1) 太郎は風邪をひいたから学校を休んだ。(I)
- (2) 太郎は風邪をひいたから学校を休まなければならない。(II)
- (3) 雨がやんだから外で遊びましょう。(III)
- (4) 消防車が来たから、火事があったのだろう。(IV)
- (5) 眼鏡はテレビの上にあったよ。いつも探しているから。(V)

(1) では、カラは、「太郎が風邪をひいた」という出来事と「学校を休んだ」という出来事を結びつけている。また、主節では、実際にあったことを述べている。したがって、I「現象描写」のレベルの節接続を表していると言える。

(2) は、(1) と同様に出来事の結びつきを表し、さらに主節には話者の「なければならない」という義務を表すモダリティが表れている。したがって、II「判断」のレベルの節接続を表している。

(3) では、「雨がやんだ」という事態と「外で遊ぶ」という事態のつながりを表すだけでなく、主節が聞き手への働きかけを表している。したがって、III「働きかけ」のレベルの節接続を表している。

しかし、(4) では、カラは「消防車が来た」という出来事と「火事があった」という出来事のつながりを述べているのではない。カラは、「消防車が来た」ということを根拠に、「火事があったのだろう」と判断するという意味関係を表している。したがって、IV「判断の根拠」のレベルの節接続を表していると言える。

(5) でもやはり、カラは「いつも探している」という事態と「眼鏡がテレビの上にある」という事態のつながりを述べているのではない。「眼鏡はテレビの上にあったよ。」という発話には、「(相手が眼鏡を)いつも探している」という話者の前提があることをカラで表している。したがって、V「発話行為の前提」のレベルの節接続を表す。

このように、カラは五つのレベルすべてで用いることができる。

### 3.2.2 モノダカラ

モノダカラは、五つのレベルについて、I「現象描写」、II「判断」、III「働きかけ」、V「発話行為の前提」で用いることができる。

しかしながら、IV「判断の根拠」の例は実例もみつからないし、作例しようとしても作れない。坪根 (1996: 39) は、モノ、モノダカラ、モノデを比較し、モノダカラとモノデは、「前件が、後件で表す帰結に至る根拠、あるいは話し手が後件の判断を下すための根拠を表し、後件はそれに基づく話し手の判断を表す」というような場合には使えないとしている。坪根のあげている用法は、五つのレベルにおけるIV「判断の根拠」のレベルにあたる。以下にそれぞれのレベルの例を示す。

- (6) 三原がちょっと妙な顔をしたものだから、院長は少しふくむような微笑をした。(I) (松本)
- (7) 階段を踏み外したものだから、足が痛くなった。(I)
- (8) 足が痛むものだから、寝ていなくてはならない。(II)
- (9) その間に、友達が来ると、スプリングをずどんずどん鳴らして、とび上ったりはねたりして遊んだものだから、マットレスの下のバネが、どうもおかしくなりかけているらしい。(II) (曾野)
- (10) 雨が降ってきたものだから、傘を借りてもいいですか？ (III)
- (11) \*地面が濡れているものだから、雨が降ったに違いない。(IV)
- (12) 今何時でしょうか。うっかり時計を忘れてきたものですから。(V) (泉原 (2007: 305) より)

なお、モノダカラは、(8) から (10) のように用いることができるので、II「判断」、III「働きかけ」のレベルの節接続を表すと言えるが、カラと比べると制限もあるようである。例えば、II「判断」については、主節で、願望、意志などは表しにくいと思われる。

(8)' 足が痛むものだから、寝てい {?よう/?たい}。(II)

また、III「働きかけ」については、主節では、(10)のように質問型の依頼は表せるものの、以下の(10)'のようには言いにくい。また、(13)で示すように、命令を表すことはできない。

(10)' 雨が降ってきた {?ものだから/から}、傘を借してください。(III)

(13) 雨が降ってきた [\*ものだから/から}、傘を借せ。(III)

また、(11)の文は、以下の(14)のように直せば、モノダカラを用いることができる。

(14) 地面が濡れているものだから、てっきり雨が降ったのだと思った。\*(IV)

しかしながら、(14)のように述べると、「雨が濡れている」という事態と「……と思った」という事態を結びつけることになり、もはや典型的なIV「判断の根拠」の意味関係を表す文とは言えない。((14)はII「判断」のレベルの文である。)モノダカラを用いると、主節で直接話者の判断を述べる文、すなわち(11)のようにも、また以下の(15)のようにも言えない。

(15) \*地面が濡れているものだから、てっきり雨が降ったのだ。(IV)

IV「判断の根拠」のレベルが表せないにもかかわらず、モノダカラは(12)のように、V「発話行為の前提」では用いることができる。ただし、V「発話行為の前提」においても、(12)のように、主節にあたる部分で質問を述べたり、依頼((16)参照)を述べる場合には用いるようであるが、やはりIII「働きかけ」の場合と同様に、命令((17)参照)には用いることができないようである。

(16) 傘を貸してくれない?うっかり傘を忘れてきた {ものだから/から}。(依頼)(V)

(17) 傘を貸 {せ/してくれ}。うっかり傘を忘れてきた [\*ものだから/から}。(命令)(V)

以上のように、カラが五つのレベルすべてで用いることができるのに対し、カラにモノダが加わったモノダカラは、モダリティ的な特別な意味が加わるとともに、五つのレベルにおいて、表せるレベルが狭まっている。特に、カラが表すことのできるIV「判断の根拠」のレベルの節連接が、モノダカラには表せないのである。

### 3.2.3 ノダカラ

次に、ノダカラについて述べる<sup>2</sup>。田野村(1990:102-103)は、「[PのだからQ]という表現は、前件Pをすでに疑念の余地なく定まったことがらとして提示し、それを十分な根拠として後件Qを発言するものだと言ってよさそうである。[PのだからQ]は、[Pである以上、当然、Q][Pであるからには、当然、Q]といった意味を表すと言ってよい。」と述べている。

<sup>2</sup> 本論では、モノダカラについては、モノデスカラ、ノダカラについては、ンダカラもまとめて扱う。これらの形態の違いによって用法の違いがあると思われる。(例えば、V「発話行為の前提」のレベルのノダカラはンダカラになりやすい。)しかし、本論ではその用法の違いを細かく述べるのが目的ではない。

この田野村の指摘のとおり、従属節は、主節で述べる判断、発話行為の根拠を示すと思われる。すなわち、五つのレベルに関して言えば、ノダカラは、I「現象描写」、II「判断」、III「働きかけ」などの節連接を表すことはできず、もっぱらIV「判断の根拠」、V「発話行為の前提」のレベルでのみ用いるCLMであると思われる。(角田(2003, 2004: 108-112 および第5章)参照。また、名嶋(2003: 28)は、ノダカラ節が「[発話内行為]までを論理関係を結ぶ対象としている」と指摘している。本論の五つのレベルで言えば、V「発話行為の前提」のレベルの用法があることを指摘しているものと思われる。)以下に例を示す。

- (18) \*風邪をひいたのだから、学校を休んだ。(I)  
 (19) 風邪をひいたのだから、学校を休まなければならない。\*(II)  
 (20) 風邪をひいたのだから、学校は休みなさい。\*(III)

(19)、(20)のように述べると、(19)では、「風邪をひいた以上、当然、学校を休まなければならない」、(20)では、「風邪をひいた以上、当然、学校は休みなさい」という意味を述べている。それぞれIV「判断の根拠」、V「発話行為の前提」のレベルの節連接を表していると言える。

なお、「～以上、当然～」という意味は、カラでは表しにくい。さらに例をあげる。

- (21) 彼は帰って来た {のだから/\*から}、彼女を愛しているのだ。(IV)  
 (22) 安田はあの四分間の見通しを知っている。鎌倉の妻のところへ始終行っている {のだから/?から}、いつかそれに気づいていたに違いない。(IV) (松本)  
 (23) また忘れ物したの? まったくしょうがない {んだから/\*から}。(V)  
 (24) 志乃がそういう {のだから/から}、なにかやってもらいなさいよ。(V) (三浦哲郎)

このように、カラが五つのレベルすべてで用いることができるのに対し、ノダカラはIV「判断の根拠」およびV「発話行為の前提」のレベルでしか用いない。モノダカラの場合と同様に、カラにノダが加わったノダカラも、五つのレベルにおいて表せる範囲が狭まっている。また、IV「判断の根拠」、V「発話行為の前提」のレベルの意味を表すといっても、カラの表す意味とは異なり、意味が特化している。

なお、角田(2004: 156, 210)は、詳細は別の機会に述べるとしながらも、(i)モノダカラが、ノデ、カラなどと比べ、I「現象描写」からIII「働きかけ」のレベルにおいて、より話者の気持ちを強く表すこと、(ii)モノダカラがI「現象描写」からIII「働きかけ」のレベルを表すのに対し、ノダカラがIV「判断の根拠」とV「発話行為の前提」のレベルを表すことに言及した。上記に述べたことから、やはりモノダカラは、(i)ノデ、カラなどと比べ、話者の気持ちを強く表し、(ii)V「発話行為の前提」のレベルも表すものの、I「現象描写」からIII「働きかけ」のレベルを中心に表すと言える。一方、ノダカラはIV「判断の根拠」およびV「発話行為の前提」を表すと言える。



### 3.2.4 カラニハ

カラニハについて、五つのレベルにおける用法を見る。3.2.3 節の、田野村のノダカラについての引用の中で、ノダカラの意味を「Pであるからには、当然、Q」と述べている部分があった。このように、カラニハを用いる場合も、文の意味として、従属節の内容を前提として、主節で話者の判断、発話を述べる。つまり、カラニハは、「当然～」と帰結するための前提を述べる場合に用いるのである。

また、先行研究も述べているように、主節では、単に事態を描写することはできない。(久保(1997: 57), 前田(2009: 173) など参照。)

カラニハも、ノダカラと同様に、I「現象描写」、II「判断」、III「働きかけ」のレベルの節連接は表さず、IV「判断の根拠」およびV「発話行為の前提」のみ表すと思われる。また、IV「判断の根拠」、V「発話行為の前提」のレベルの節連接を表すとはいっても、カラとは異なる意味を表す。以下に例をあげる。

- (25) \*試合に出ると決めたからには、練習した。(I)  
 (26) 試合に出ると決めたからには、しっかり練習しなければならない。\*(II)  
 (27) 試合に出ると決めたからには、しっかり練習なさい。\*(III)

(26)、(27) のように述べると、(26) では、「試合に出ると決めた以上、当然、しっかり練習しなければならない。」、(27) では、「試合に出ると決めた以上、当然、しっかり練習なさい。」という意味を述べている。従属節で述べたことを前提として、(26) の主節では判断を述べ、(27) の主節では発話行為が表れている。それぞれIV「判断の根拠」、V「発話行為の前提」のレベルの節連接を表している。さらに例をあげる。

- (28) 商売をする {からには／\*から}、一時的でなく永続的であってほしい。(IV) (星)  
 (29) あれだけのことがおきた {からには／?から}、よほどのことがあったにちがいない……。 (IV) (立原)  
 (30) だが、おまえが金時計をさげるといふ {からには／\*から}、何かいい話でももちあがったのかい。(V) (山本)  
 (31) 「(略) それで、蒸発した {からには／\*から}、当分、家へ帰らないおつもりですか」(V) (曾野)

カラニハもやはり、モノダカラ、ノダカラと同様に、意味が特化すると同時に、五つのレベルにおいて、表せる範囲がカラよりも狭まっている。

以上述べたことを表1にまとめる。なお、3.2.2 節で述べたように、モノダカラはカラと比べると、II「判断」、III「働きかけ」、V「発話行為の前提」のレベルにおいて制限がある。一方、3.2.3 節、3.2.4 節で述べたように、ノダカラ、カラニハは、カラと比べて、用いることのできるレベルは狭まっているものの、IV「判断の根拠」、V「発話行為の前提」のレベルでは、カラでは表せないニュアンスを表す。このようなことは、モノダカラ、ノダカラ、カラニハの意味が特化していること

から生じると思われる。表の上では、それぞれの CLM として、どのレベルで用いるか、用いないかを「+」, 「-」で表す。

表1 五つのレベルとカラ, モノダカラ, ノダカラ, カラニハ

	I	II	III	IV	V
カラ	+	+	+	+	+
モノダカラ	+	+	+	-	+
ノダカラ	-	-	-	+	+
カラニハ	-	-	-	+	+

### 3.3 ナラとモノナラ

ここでは、ナラとモノナラについて、それぞれの用法を五つのレベルとの関係で述べる。

#### 3.3.1 ナラ

ナラは、I「現象描写」のレベルでは用いることができない<sup>3</sup>。II「判断」、III「働きかけ」のレベルで用いることはできるが、バ、タラなどで言い換えるほうが自然である。(角田 (2003, 2004), Tsunoda (forthcoming) 参照。) IV「判断の根拠」、V「発話行為の前提」のレベルで用いるのがもっとも自然であると思われる。

I「現象描写」のレベルについて述べると、ト、バ、タラなどを用いると (32) のように、実際に起こった事柄を表すことができる。

(32) このボタンを押 {すと／せば／したら} 切符が出た。(I)

しかしながら、ナラを用いると、実際に起こった事柄を表すことができない。

(33) \*このボタンを押 {すなら／したなら}, 切符が出た。(I)

また、ト、バなどを用いると、(34) のように、習慣的に起こる事柄を表すことができる。

(34) このボタンを押 {すと／せば} 切符が出る。(I)

しかしながら、ナラを用いると、習慣的に起こる事柄を表しにくい。

(35) ?このボタンを押 {したなら／すなら} 切符が出る。(I)

角田 (2004: 56, 198) で述べたように、タナラ、ルナラを仮定、反実仮想などの意味で用いることはある。これらは、II「判断」、III「働きかけ」にあたる。しかしながら、これらは歌詞であっ

<sup>3</sup> 角田 (2004: 27, 56) は、ナラは I「現象描写」のレベルで不自然ながら使えるという扱いをしていた。しかしながら、その後間違いであることに気づき、2011年に本書を増刷した折に修正した。第2刷では、ナラは I「現象描写」のレベルでは用いないとしてある。

たり、やや古い言い方の感じがする。(鈴木 (1993: 132-134) 参照。)

- (36) もしも私家が家を建てたなら、小さな家を建てたでしょう。(反実仮想) (II) (歌詞：小坂)  
 (37) 今後一週間雨が「降らないなら／降らなかったなら」、水不足が深刻になる。(仮定) (II) (田野村 (1990: 93) より)  
 (38) (もし) 彼が来たなら、この手紙を渡してください。(仮定) (III)

このようにみると、今日では、ナラは、IV「判断の根拠」、V「発話行為の前提」のレベルを中心に表すと思われる。以下に例を示す。

- (39) 花子が使っているなら、よい化粧品にちがいない。(IV)  
 (40) シャッターが閉まっているなら、今日は営業していないのだろう。(IV)  
 (41) 外に出るなら、オーバーを着ていったほうがいいわよ。(V)  
 (42) お腹がすいているなら、ビスケットがあるよ。(V)

### 3.3.2 モノナラ

第2節で述べたように、モノナラは、(i) 動詞の-(y)oo形に接続する場合と、(ii) 動詞のル形、タ形、可能形などに接続する場合がある。この二つの場合によって用法が異なる。ここでは (i) と (ii) の場合をモノナラ1、モノナラ2と呼び分ける。

モノナラに前接する動詞の形によって用法が違うことは先行研究(玉村(1984)など参照)でも指摘している。しかし、その用法の違いがどのような意味を持つかは述べていない。実は接続する動詞の活用形の違いは、以下にみるように、五つのレベルにおいて大きな違いを意味する。

モノナラ1は、I「現象描写」、II「判断」のレベルで用いる。III「働きかけ」は不自然なようである。国立国語研究所(2001: 58)では、「後件は、疑問や願望、意志・命令等のムード表現を取らない。」と述べている。確かに、主節では疑問、願望、意志、命令などは表せない、あるいは表しにくいと思われる。以下の例文(45)から(50)で示すように、II「判断」のレベルにおいては制限があり、III「働きかけ」のレベルは表しにくいと言える。

また、モノナラ1は、IV「判断の根拠」、V「発話行為の前提」のレベルでは用いることができない。以下に例を示す。

- (43) 太郎がちょっとでも答を間違えようものなら、こっぴどく叱られた。(I)  
 (44) むかしの感化院のように、職員が少年達を殴ろうものなら、民主主義を盾に人権問題に発展し、職員の方が犠牲されるのであった。(I) (立原)  
 (45) 詐欺にあったことを報告しようものなら、いままで地道に培ってきた信頼が台無しになる。(II) (服部)  
 (46) デオンが所持している一切の文書がプラスランの手に渡り、公開されようものなら、王政の基盤をゆるがすものとなるだろう。(II) (窪田)  
 (47) \*太郎がちょっとでも答を間違えようものなら、叱ってやろう。(意志) (II)

- (48) \*太郎が間違えようものなら、叱ってやりたい。(願望) (II)  
 (49) \*太郎が間違えようものなら、叱られましたか? (疑問) (III)  
 (50) ?太郎が間違えようものなら、叱ってやれ。(命令) (III)  
 (51) \*故郷に帰ろうものなら帰りたい。(IV)  
 (52) \*できようものならやってみろ。(V)

一方、モノナラ2は、I「現象描写」、II「判断」、III「働きかけ」のレベルでは用いることができない。IV「判断の根拠」、V「発話行為の前提」のレベルでのみ用いると思われる。ナラを用いる場合に比べ、従属節では実現しそうなことを述べる。

- (53) 太郎が答を間違えた {\*ものなら/\*なら}、こっぴどく叱られた。(I)  
 (54) 花子が異論となえる {\*ものなら/なら}、大変なことになるだろう。(II)  
 (55) 太郎が答を間違えた {\*ものなら/なら}、叱ってやれ。(III)  
 (56) 帰ってくる {ものなら/なら} とっくの昔に帰ってきているはずだ。(IV)  
 (57) 故郷に帰れる {ものなら/なら} 帰りたい。(IV)  
 (58) できる {ものなら/なら}、やってみてくれ。(V) (星)  
 (59) 食べられる {ものなら/なら}、食べてみろ。(V)

3.3.1 節で述べたように、ナラを用いるとI「現象描写」のレベルは表すことができない。ところが、モノナラ1を用いると、I「現象描写」のレベルを表すことができる。(43)、(44)のように、習慣的、繰り返し起こる出来事、事態を述べるようである。

また、3.3.1 節で述べたように、多少古めかしい言い方ではあっても、ナラを用いると、III「働きかけ」のレベルの節接続を表すことができる。しかしながら、モノナラ1を用いる場合、III「働きかけ」の実例はみつからなかった。(49)、(50)は作例であるが、不自然に感じる。

また、モノナラ2は、もっぱらIV「判断の根拠」、V「発話行為の前提」のレベルを表す。

ナラと比べて、モノナラ1、モノナラ2は、それぞれ五つのレベルにおいて用いる範囲が変わっている。モノナラ1がI「現象描写」の節接続を表せるというのは、ナラよりも範囲が一見、広がったかのように見える。しかし、モノナラ1とモノナラ2は、それぞれ前接する動詞の形にも違いがあり、それぞれの五つのレベルにおける用法の分布は、ナラの場合より狭まっている。また、同じレベルにおいても、ナラと比べてモノナラの意味は特化していると言えよう。

以上のことを表2にまとめる。表2の中では、ナラの古めかしい用法を「(+)」で示した。

表2 五つのレベルとナラ、モノナラ

	I	II	III	IV	V
ナラ	-	(+)	(+)	+	+
モノナラ1	+	+	?	-	-
モノナラ2	-	-	-	+	+

なお、表1、表2で示したように、カラ (3.2.1 節)、ナラ (3.3.1 節) などのように、中立的な意味を表す CLM の場合、五つのレベルにおいて、用法の分布はつながっている傾向がある。(他の CLM については、角田 (2003, 2004), Tsunoda (forthcoming) 参照。) しかしながら、3.2.2 節で述べたように、モノダカラは、他のレベルで用いることができるにもかかわらず、IV「判断の根拠」のレベルでは用いることができない。モノナラは、モノナラ1でもモノナラ2でも、III「働きかけ」のレベルの例はみつからなかった。このように、五つのレベルにおいて、用法の分布が非連続的、変則的になるのは大変興味深い<sup>4</sup>。

### 3.4 ダケとダケニ

ここでは、ダケとダケニについて、それぞれの用法を五つのレベルとの関係で述べる。

#### 3.4.1 ダケ

ダケは、以下の (60), (61) のように主節の述語が表す事態の程度を表すことができる<sup>5</sup>。

- (60) 食べたいだけ食べなさい。  
 (61) 頑張っただけ結果はよかった。

主節の述語が表す事態の程度を表すという点で、様態副詞のように、述語を直接修飾するとも言える。したがって、従属節が表す事態と主節が表す事態との関係において、お互いの独立性は比較的低い。ただ、ダケ節は以下の (62), (63) のように時間、場所の副詞を含むことができるので、南 (1974) の段階から言えば、B 段階とも言える。

- (62) 昨日休んだだけ、今日はしっかり仕事をしなければならない。  
 (63) 家でよく寝ただけ、学校では気分が良かった。

上記のことを勘案して、五つのレベルにあてはめて考えると、ダケはI「現象描写」、II「判断」、III「働きかけ」のみを表し、IV「判断の根拠」、V「発話行為の前提」のレベルは表さないとされる。以下に例をあげる。

- (64) 食べたいだけ食べた。(I)  
 (65) 昨日休んだだけ働かなければならない。(II)  
 (66) お金をもらっただけ働きなさい。(III)  
 (67) ?(太郎さんは) 長い間ケガで試合に出られなかっただけ、今回の優勝はことさら嬉しいでしょう。\*(IV)

<sup>4</sup> 3.2.2 節でみたように、モノダカラは、II「判断」、III「働きかけ」のレベルで用いることができるものの、制限もある。また、モノナラ1、モノナラ2を合わせても、III「働きかけ」のレベルで用いることが難しい。興味深いことに、モノノも III「働きかけ」のレベルで用いにくい。(角田 (2011), Tsunoda (forthcoming) 参照。) これらはモノという形態を共有している。何らかの関係があるかもしれない。

<sup>5</sup> 本論では、いわゆる取り立て助詞のダケは扱わない。

(68) ?喜んでください。長い間ケガで試合に出られなかっただけ。\*(V)

(69) 働きなさい。お金をもらっただけ。\*(V)

(67) から (69) は非文とは言えないかもしれないが、ダケが表すのは、数量的な意味であり、IV「判断の根拠」、V「発話行為の前提」としての意味は表せない。このように、ダケは、従属節が表す事態と主節の表す事態の間の、数量的な相関関係を表すと言える。

### 3.4.2 ダケニ

ダケニは、第2節で述べたように、従属節の内容に相応して、あるいは、そのぶんなおさら、いっそうといった意味が表れる。主節では、単なる現象、事態を述べることはできず、話者の感情や判断を述べる。(三枝 (1991: 56), 廣田 (1999: 10) 参照。) また、主節には、疑問、命令、禁止、相手への疑問などは表れない。(中畠 (1995: 523), 伊藤 (1996: 50) 参照。)

また、中畠 (1995: 521) は、森田 (1980), 寺村 (1991) などを引用して、「ダケニは前件を判断の根拠として提示し、そこから当然の帰結として後件が導きだされる、という意味で用いられる。」と述べている。

五つのレベルに関して言えば、ダケニは、数量的な程度を表すダケがIV「判断の根拠」のレベルまで意味を拡張するに伴って生じたCLMであると思われる。ダケニを用いる場合は、従属節と主節の間の、単なる数量的な相関関係を述べるのではなく、主節では話者の感情や判断を述べるという情意的な意味が表れる。また、従属節で述べていることは、話者にとっては常に既知の状況であり、その状況を前提にして、主節で話者の感情や判断を述べるという意味関係も表れる。すなわち、IV「判断の根拠」のレベルの意味が表れる。

しかしながら、ダケニを用いる場合でも、IV「判断の根拠」のレベルの節接続になりきらず、II「判断」の節接続に近い意味関係を表す場合もあるように思われる。その点について述べる。

以下の(70)から(75)のような場合は、ダケニ節で、話者の既知の状況を根拠として述べ、主節で話者の判断を述べる、という意味関係がみられる。これは五つのレベルにおいては、IV「判断の根拠」のレベルと言える。「～を考慮すると、(主節で)～と判断する」といった意味関係が表れる。また、この場合には、ダケで言い換えにくい。

(70) 太郎さんは長い間ケガで試合に出られなかった {だけに/ ? だけ}、今回の優勝はことさら嬉しいでしょう。(IV)

(71) 西のローマが衰退しつつあった {だけに/ \* だけ}、「新ローマ」とも呼ばれたコンスタンティノーブルの急速な発展は、当時の人々の注目を集めるに充分であったろう。(IV) (塩野)

(72) 互いへのいとしさだけが熱く燃えさかっている、それが突然であった {だけに/ \* だけ}、別れてしまうと相手がこの世に存在しなくなるような気がするのではないかという、その不安だけで一緒にいたのかもしれない。(IV) (筒井)

- (73) 館長はまた、苦しげに咳き込んだ。学究肌のまじめな人柄 {だけに／\*だけ}、口裏をあわせるとというのがひどく苦痛であるようだった。(IV) (八木)
- (74) 古代史における長岡京の持つ意義が高まっている {だけに／\*だけ}、一刻も早く保存の手が差しのべられるべきであろう。(IV) (山中)
- (75) とはいえ仮設は仮設である。恒久的に使えるものでない {だけに／\*だけ} 余分な投資は避けなくてはならない。(IV) (植田)

しかしながら、以下の (76) から (83) のような場合には、「(従属節の内容) を考慮すると、(主節で) ～と判断する」というほどの意味関係は表さない。つまり、IV「判断の根拠」の意味は表さない。主節に話者の判断、感情などが表れるものの、従属節で述べることと主節で述べることは、数量的な相関関係を表している。この場合は、ダケでも言い換えやすい。3.4.1 節で述べたダケの用法を勘案すると、(76) から (83) のような場合のダケニは、II「判断」のレベルの節連接を表すと言える。

- (76) 東洋工業は大阪や東京から離れている {だけに／だけ} 逆に資材の入手には有利だった。(II) (GP 企画センター)
- (77) 長い間待っていた {だけに／だけ}、喜びは深かった。(II) (三浦綾子)
- (78) 期待していた {だけに／だけ}、落胆も大きかった。(II) (沢木)
- (79) 彼らのほうが事件にはなれている {だけに／だけ}、一枚うわてであった。(II) (星)
- (80) いや、口が出せない {だけに／だけ}、気分のもやもやとしたものは、いっそうこうじたのであった。(II) (松本)
- (81) 「(略) 谷口は真面目な {だけに／だけ}、追い詰められると却って危険になった」(II) (赤川)
- (82) 一方、ブラックジャックと呼ばれるトランプゲームには、ルールがやや複雑な {だけに／だけ}、かなり高度の戦法がある。(II) (藤原)
- (83) なんの効果もないことが分っている {だけに／だけ}、よけいに苛立ってしまうのだ。(II) (安部)

三枝 (1991: 58) は、「従属節、主文とも形容詞の場合には、「だけに」と「だけ」がかなり意味的に近く感じられる。」と指摘している。確かに、その傾向もあると思われるが、(76) から (83) の例をみると、必ずしも、従属節、主節の述語は形容詞とは限らず、動詞の場合もある。従属節の品詞に限らず、従属節の内容と主節の内容が比較的単純に数量的な相関関係を表す場合には、ダケニはダケと近い意味を表すようである。

しかし、ダケニはダケと近い意味も表せる場合があるとはいえ、ダケニを用いると、主節には話者の感情や判断が表れる。ダケとダケニは何らかの程度の相関関係を述べるのは同様であるが、ダケニは情意的な意味を表すという方向に移行している。

以上述べたように、ダケは従属節と主節の表す事態における数量的な相関関係を表す意味しか持たず、五つのレベルにおいても、I「現象描写」、II「判断」、III「働きかけ」のレベルの節連

接を表すに留まるのに対し、ダケにニが加わったダケニは、話者の感情や判断を表すという情意的な意味を強く表す<sup>6</sup>。五つのレベルにおいても、ダケニはII「判断」、IV「判断の根拠」のレベルの節接続のみ表す。やはり、ダケとダケニを比べると、ダケニは用いるレベルが狭まっていて、意味が特化している。また、五つのレベルにおいても、用法の分布が非連続的、変則的になっている。

五つのレベルにおける、ダケとダケニの違いを以下の表3に示す。なお、表1、表2で述べたことと同様に、それぞれのCLMの用法があるかどうかを「+」、「-」で表す。例えば、II「判断」のレベルで、ダケとダケニは両方「+」であるが、ダケを用いる場合と、ダケニを用いる場合には、情意的なニュアンスに違いがある。

表3 五つのレベルとダケ、ダケニ

	I	II	III	IV	V
ダケ	+	+	+	-	-
ダケニ	-	+	-	+	-

#### 4. 結論

本論では、以下の三つのセットについて、それぞれのCLMを比較した。

- (i) カラとモノダカラ、ノダカラ、カラニハ
- (ii) ナラとモノナラ
- (iii) ダケとダケニ

それぞれもとにあった形態に他の要素が加わることにより、モダリティ的な意味が加わる。そして、これらのCLMを用いると文全体の意味、用法が変化し、五つのレベルで見ると、用法が狭まり、特化するという現象がみられる。特に、モノダカラ、モノナラ、ダケニの場合は、五つのレベルにおいて、用法の分布が連続的ではなく、非連続的、変則的な分布を示す。

このように、他の要素が加わって、特別な意味になるというのは、無標、有標の関係である。無標なものが基本的な意味であるとする、それが有標化することにより、特別な意味が表れる。

本論で述べた個々のCLMについては、これまで多くの先行研究もあった。しかしながら、本論のように五つのレベルで意味・用法を分析することによって、それぞれの違いが明確になる。

<sup>6</sup> ちなみに、「ニ」を加えると、数量を表す「以上」も情意的な意味を表すようになると思われる。以下に例を示す。

例：a. 薬は指示された {以上／?以上に} 飲むな。  
b. 試験は思った {\*以上／以上に} 難しかった。



## 参考文献

- 遠藤織枝 (1984) 「～からは／～からには」『日本語学』3(10): 42-51.
- 藤田保幸 (2006) 「複合辞研究の展開と問題点」藤田保幸・山崎誠 (編)『複合辞研究の現在』3-19. 大阪：和泉書院.
- 廣田周子 (1999) 「理由を表す「だけに」」『文化外国語専門学校日本語課程紀要』13: 5-14.
- 伊藤智博 (1996) 「原因・理由の「だけに」に関する一考察」『三重大学日本語学』7: 54-44.
- 泉原省二 (2007) 『日本語類義表現使い分け辞典』東京：研究社.
- 国立国語研究所 (2001) 『現代語複合辞用例集』東京：国立国語研究所.
- 此島正年 (1983) 『助動詞・助詞概説』東京：桜楓社.
- 久保るみ (1997) 「「以上」と「からには」について」『日本語・日本文化研究』7: 53-64. 大阪大学日本語日本文化教育センター.
- 前田直子 (2009) 『日本語の複文——条件文と原因・理由文の記述的研究——』東京：くろしお出版.
- 増倉洋子 (1996) 「「ものなら」について考える」『長崎大学外国人留学センター紀要』4: 119-136.
- 益岡隆志 (1997) 『複文』東京：くろしお出版.
- 益岡隆志 (2011) 「原因理由を表すダケニとダケアッテの分化」『日本語・日本学研究』1: 1-12. 東京外国語大学国際日本研究センター.
- 松木正恵 (1990) 「複合辞の認定基準・尺度設定の試み」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』2: 27-52.
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』東京：大修館書店.
- 宮島達夫・仁田義雄 (編) (1995) 『日本語類義表現の文法 (下) 複文・連文編』東京：くろしお出版.
- 森田良行 (1980) 『基礎日本語2』東京：角川書店.
- 森田良行・松木正恵 (1989) 『日本語表現文型』東京：アルク.
- 永野賢 (1953) 「表現文法の問題——複合辞の認定について」金田一博士古希記念論文集刊行会 (編)『金田一博士古希記念言語民族論叢』東京：三省堂. (のち、永野賢 (1970)『伝達論にもとづく日本語文法の研究』東京：東京堂出版、永野賢 (1986)『文章論総説』東京：朝倉書房にも採録)
- 名嶋義直 (2003) 「ノダカラの意味・機能——語用論的観点からの考察——」『語用論研究』5: 17-30.
- 中島孝幸 (1995) 「ダケニとダケアッテ——通念依存の形式」宮島達夫・仁田義雄 (編), 521-530.
- 中島紀子 (2005) 「「モノナラ」に関する一考察」『国文学踏査』17: 205-196. 大正大学国文学会.
- 中里理子 (1995) 「「だけに」「ばかりに」の接続助詞的用法について」『言語文化と日本語教育』9: 87-98. お茶の水女子大学.
- Narrog, Heiko (2009) *Modality in Japanese[:] The layered structure of the clause and hierarchies of functional categories*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- 三枝令子 (1991) 「「だけに」の分析」『言語文化』27: 47-63. 一橋大学.
- 塩入すみ (1995) 「カラとカラニハ」宮島達夫・仁田義雄 (編), 514-520.
- 鈴木義和 (1993) 「ナラ条件文の意味」益岡隆志 (編)『日本語の条件表現』131-148. 東京：くろしお出版.
- 高山善行 (2002) 『日本語モダリティの史的探究』東京：ひつじ書房.
- 玉村禎郎 (1984) 「～ものなら」『日本語学』3(10): 81-88.
- 田中寛 (2010) 『複合辞からみた日本語文法の研究』東京：ひつじ書房.
- 田野村忠温 (1990) 『現代日本語の文法 I——「のだ」の意味と用法——』大阪：和泉書院.
- 寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味 III』東京：くろしお出版.
- 坪根由香里 (1996) 「終助詞・接続助詞としての「もの」の意味——「もの」「ものなら」「ものの」「ものを」——」『日本語教育』91: 37-48.
- 角田三枝 (2003) 「日本語の節・文の接続とモダリティ」博士論文、お茶の水女子大学.
- 角田三枝 (2004) 『日本語の節・文の接続とモダリティ』東京：くろしお出版.
- 角田三枝 (2011) 「モノノとナイマデモ：節接続の五つのレベルにおける逆接と譲歩条件」『国立国語研究所論集』2: 107-134.
- Tsunoda, Mie (forthcoming) Five-level classification of clause-linkage in Japanese. *Studies in Language*.

## 例文出典

新潮文庫の100冊 CD-ROM, 1995, 新潮社より

赤川次郎『女社長に乾杯!』, 安部公房『砂の女』,  
藤原正彦『若き数学者のアメリカ』, 星新一『人民は弱し官吏は強し』,  
松本清張『点と線』, 三浦綾子『塩狩峠』, 三浦哲郎『忍ぶ川』,  
沢木耕太郎『一瞬の夏』, 塩野七海『コンスタンティノーブルの陥落』,  
曾野綾子『太郎物語』, 立原正秋『冬の旅』, 筒井康隆『エディプスの恋人』,  
山本有三『路傍の石』

小坂明子『あなた』(歌詞)

国立国語研究所 KOTONOHA 現代日本語書き言葉均衡コーパス『少納言』より

GP 企画センター (2000)『懐旧のオート三輪車史』東京: グランプリ出版.  
服部真澄 (2001)『週刊文春』2001年5月3・10日号 (第43巻第17号, 通巻2126号).  
窪田般弥 (1995)『女装の剣士シュヴァリエ・デオンの生涯』東京: 白水社.  
植田紳爾 (2002)『宝塚百年の夢』東京: 文芸春秋.  
八木莊司 (2003)『天皇陵伝説』東京: 角川書店.  
山中章 (2001)『長岡京研究序説』東京: 塙書房.

## Modality in Clause-linkage Markers

TSUNODA Mie

Project Collaborator, National Institute for Japanese Language and Linguistics [-2012.03]

### Abstract

Japanese has a few sets of clause-linkage markers ('CLMs') — such as the causal CLMs *=kara*, *=nodakara* and *=monodakara* — in which each set consists of a morpheme and other compound forms that are created by adding one or more other elements to this morpheme. The present paper deals with the following three sets: (i) *=kara*, *=monodakara*, *=nodakara*, *=karaniwa*, (ii) *=nara*, *=mononara*, and (iii) *=dake*, *=dakeni*.

In such sets of CLMs, adding an element or elements may create a modal meaning in the resultant forms. That is, the meanings of the compound forms become specialized. When this specialization takes place, the environments in which they can be used also become specialized. Specifically, in terms of the five levels of clause linkage (Tsunoda 2003, 2004, forthcoming), these environments become narrower and, furthermore, the distribution of the use of *=monodakara*, *=mononara* and *=dakeni* becomes discontinuous. This phenomenon is a nice illustration of markedness theory. Namely, those CLMs that are marked morphologically become marked semantically as well, and they are restricted to a narrower range of environments accordingly. That is, they become marked syntactically, too.

**Key words:** *=monodakara*, *=mononara*, *=dakeni*, *=karaniwa*, markedness